

# 鹿の歯の化石 ～多摩丘陵から発掘～

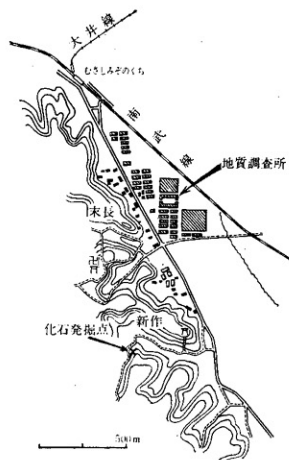
地質調査所付近の神奈川県川崎市木出張所の工事現場（川崎市新作地内）から 象化石（アケボノ象—*Parastegodon cf. aurorae*(MATSUMOTO)）が発見されたことは すでに本誌 No. 45 (1958—5) で紹介したが その同じ場所から 去る1月16日 鹿の歯の化石が発見されたので ここに紹介しよう。

この化石は正確にいえば **ニホンムカシジカ** (*Cervus paraenipponicus* SHIKAMA 東京大学高井冬二教授鑑定) である。下顎骨および 旧歯の一部 (標本の長さ 7.5cm) であるが 写真に示すように保存はかなりよい。

ニホンムカシジカは 第四紀洪積世中期の地層から多数発見され 今までに瀬戸内海の小豆島 関東北部の葛生そのほか 横浜 鶴見付近からも発見されている。

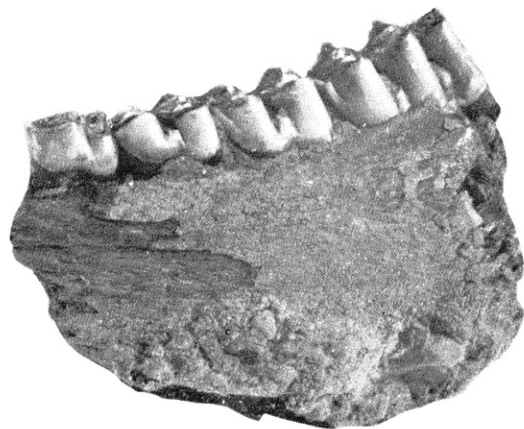
この化石の産出位置は写真に示す通りである。 **下末吉層最下部** の泥岩礫を多量に含む砂質粘土中に やや炭化した木片と一緒に産出した。少し上位には含貝化石砂質粘土があり この中にはハイガイ マガキ カガミガイ オキシジミ ウミナなどの ごく浅い海底にすむ貝の化石が多数含まれている。

前回紹介したアケボノ象は ほとんど同じ場所である とはいえ 下末吉層の下に不整合関係で横たわる三浦層



化石発掘地点位置図

群小柴層 (鮮新世末期の地層) の やや固結した砂岩泥岩互層から産したものであり 産出層が全くちがっている。この場所は 三浦層群堆積後長い間陸地になっていたが 洪積世中期 (約35万年前) にふたたび沈下し 当時の谷部に土砂が堆積した。これが下末吉層である。鹿の歯の化石はおそらく河川によって陸地から運びこまれたのであろう。なお この時代はいわゆるミンデル リス間氷期つまり **第2間氷期** (約24~38万年前) にあたる。アケボノ象はすでに絶滅し ナウマン象がそれにかわって横行していた。マンモス象の出現は はるか後の時代である。 (地質部)



発掘された鹿の歯の化石(実物の長さ7.5cm)



発掘地点の位置